

ライオンのミイラを発見

原文：A lion found in the Egyptian tomb of Maia

Nature Vol.427(211)/15 January 2004; www.naturejpn.com/digest

ライオンはナイルの谷で成長し、死んでいった聖なる動物の一つであると、古典学者たちは述べているし、ファラオの碑文にも書かれている。だがこれまでエジプトでは、その証拠は見つかっていなかった——サッカラのバステイオン古墳を発掘するまでは。

本稿では同古墳で発見され、ミイラ化したオスのライオン (*Panthera leo*) の完全な骨格を紹介する。このミイラは紀元前数世紀中につくられたネコの共同墓地¹に埋葬されており、同墓地にはもっと古い時代でツタンカーメン王(紀元前14世紀、新王国時代)の乳母であったMaiaの墓もあった。ネコの女神バステ(バスティスとしても知られる)に捧げられた墓でこの重大な発見があったことから、末期王朝およびギリシャ時代にライオンが聖なる動物という地位を占めていたことが確認できた。

第18王朝および第19王朝の大岩窟墓が、メンフィス古墳のサッカラ遺跡でフランス・バステイオン考古学調査団(MAFB)によって発掘されている。新王国時代の墓地は、その一部がネコの共同墓地として再利用されており、紀元前数世紀中にネコ(かつてはライオンのメスの女神バステに捧げられたバステイオン地区内に位置している(補足資料を参照))。

Maiaの墓は1996年にMAFBによって発見された。この墓は少なくとも2階に分かれていて、一つは礼拝堂でもう一つは埋葬室となっている。埋葬室には当初の墓地の形跡はなく、人間、そして動物(主にネコ)の遺体で一杯になっていた。中心となる埋葬階は3つの部屋に分かれ、それぞれ廊下でつながっていた。1番目の部屋はおおよそL字型をしていて岩窟柱で支えられている。これに対して、2番目の部屋は小さめのほぼ長方形で、重要度の低い下の階に向かって柱が伸びている。3番目の部屋(4.5m × 4m)は入念に作られ整えられていた。これら3つの部屋の床は木棺や石棺、人間や動物の死骸で埋め尽くされ、おびただしい数の骨も落ちていた。最も多いのはミイラ化したネコだったが、層位学的な特徴から、おそらく墓地ができる数世紀前から人間の死体はここに存在していたとわかった。

2001年11月に墓地階の主室で発掘作業を

していたところ、私たちは驚くべき発見をした。ほぼ完全な形で乱されていないネコの骨格が見つかったのだ。それは以前に発見されたネコよりはるかに大きいものだった。ライオンだった。岩に横たわり、頭を北向きにして、体は東向きになっていた。このライオンの周囲を数多くの動物の骨や棺が取り囲んでいた。この棺は中に入っている死体よりもかなり年月が経ってから部分的に壊され、地中に埋められていた(補足資料を参照)。

このライオンの保存状態は素晴らしかった。ただし、頭蓋骨は部分的に壊れ、肩甲骨と大腿骨は損傷していた。死体をミイラ化したことを示すような包帯はなかったが、ミイラ化していたことがわかる証拠は見つかった。それは骨格の位置、犬歯の穴の内部にある組織の小さく劣化した断片、この遺跡で発見されたネコのミイラのものに似た骨の付着物や着色である。

最初に見たときは、その骨格の大まかな位置関係からネコのミイラを思わせた。しかし、後肢の配置は違っていた。ライオンの場合には、前肢と後肢は身体の前部に沿って伸びており、尻尾が脚の間から跳ね返っている。だがネコのミイラでは、後肢は骨盤に向かって押し込まれ、尻尾は足の間に曲線を描いている。ライオンの骨どうしはきちんとつながっているが、脳頭蓋だけはわずかに離れている。おそらく包帯をほどいたときに、脱落したのだろう。

骨の大きさを計測したところ、オスのライオンとしては最も大きい部類で、メスの範疇は超えていた(C. Grossの私信)ため、この骨格はオスのものであることは明らかだ(補足資料を参照)。多くのネコのミイラのX線写真と比べると^{1,2}、このライオンはミイラにして埋葬することを目的に若いときに殺されたという証拠はみられず、自然死した可能性が高い。

この骨格は完全に骨端が融合し、歯の髄室が非常に狭いことから、おとなのライオンだったことがわかる。また歯の磨耗状態と病変から、年老いてから捕獲されたと思われる。胸の同じ側にある7本の肋骨は真ん中で骨折し、その上には皮膚硬結が起きていた。転んだか、ひどく殴られたために、骨折したのかもかもしれない。

ファラオの時代にライオンが存在したことは数多く語られているが³、現在わかっている知識では、エジプトで完全な骨格が発見されたのは、今回が初めてである(アビュドスでも骨がいくつか見つまっているが⁴)。今回の発見から、このライオンとその生活について(年齢、病変、事故などの)貴重な情報が得られるはずだ。このライオンが埋葬されていた場所は第18王朝(紀元前約1430年)の女性の墓だったが、エジプト後期とヘレニズム時代のエジプトにおいて非常に重要であった動物礼拝と関係がある、後のバステイオン古墳に入っていた(補足資料を参照)。

このミイラ化したライオンはオスだったため、女神セメクトカバステの息子である神マヘス(ミシス)⁵の化身と考えられていたのかもかもしれない。1頭のライオンの墓があったからといって、そこがライオンの共同墓地だったとはいえないが、今回のメンフィスの実例によって紀元前数世紀のエジプトにライオンが存在したことは確認できた。ライオンは寺院の境内で育てられ、メンフィス古墳を含む聖なる動物の共同墓地に埋葬されたと考えられている(民衆文学やギリシャの碑文⁶、ミイラ化の証拠となる爪など⁷から、それがうかがえる)。

著者と連絡先

Cécile Callou*[§], Anaick Samzun†[§], Alain Zivie‡[§]

*MNHN et CNRS (UMR 5197), Paris, France

†INRAP, Paris, et UMR 7041, Nanterre, France

‡CNRS (UMR 8567), Paris, France

§Mission Archéologique Française du Bubasteion, Saqqara, Egypt

e-mail: az.hypogees@wanadoo.fr

1. Zivie, A. & Lichtenberg, R in *Proc. VIIIth Int. Congress Egyptologists* Vol. 2, 605–611 (American University in Cairo Press, New York, 2003).
2. Armitage, P. & Clutton-Brock, J. *MASCA J.* 1, 185–188 (1980).
3. Houlihan, P. F. *The Animal World of the Pharaohs* (Thames & Hudson, London, 1996).
4. Boessneck, J. & von den Driesch, A. *Mitt. Deutschen Archäologischen Inst., Abteilung Kairo* 46, 86–87 (1990).
5. Zabkar, L. V. *Miyis (Miös, Mahes)*. *Lexikon der Aegyptologie* (Wiesbaden) IV, 163–165 (1980).
6. Thompson, D. *Memphis under the Ptolemies* 29 n. 115 (Princeton Univ. Press, 1988).
7. Charron, A. *Bull. Soc. d'Égyptologie Genève* 21, 5–10 (1997).

本稿の補足資料がネイチャーのウェブサイトにあります。この論文への金銭的な利害関係：なしとの報告